

1. 日本語教育部門

日本語教育部門は、本学に在籍する外国人留学生への日本語・日本事情教育と、日本語教師養成を行なっている。

当部門の担当する日本語・日本事情教育の授業は、大きく次の 5 種類に分類することができる。

1 留学生センター開講授業

「日本語研修コース」、「日本語・日本文化研修留学生プログラム」

2 「全学共通教育科目」としての日本語科目、

3 「学部教育科目」としての日本語科目、

4 「大学院科目」

5 「秋季集中日本語コース」

これらの日本語の授業コースのうち、「日本語研修コース」と「秋季集中日本語コース」の授業、および、「日本語・日本文化研修留学生プログラム」の一部として留学生センターが開講する「日研ゼミナール」では単位が認定されないが、それ以外は単位が認定される科目であり、本学の日本語教育の一つの特徴となっている。また、後掲の表に示すように、日本語担当教員が各学部や研究科と連携をとりながら、センターや学部の枠にとらわれずに授業を担当していることも特徴として挙げることができる。

1 留学生センター開講授業

1.1 日本語研修コース

〈コースの概要〉

日本語研修コースは、文部科学省国費研究留学生のうちで日本語の予備教育を必要とする者（「日本語研修生」と呼ばれる）を主な対象とする。渡日時以前に日本語学習歴のない者から初中級レベルにある留学生がこのコースを受講し、半年間の日本語学習の後、本学の研究生、あるいは大学院生となる。日本語研修生以外に、大学推薦の国費留学生、交流協定大学からの派遣学生、あるいは私費の留学生がこのコースに参加することもある。

このコースの日本語学習の目標は、学内外の日常生活に必要な日本語運用能力を獲得すること、および、各参加者の専門の勉学・研究活動に必要な日本語力の基礎を構築することである。

コースは、各年度 2 回開講される（それぞれ、4 月コース、10 月コース）。

4 月コース：4 月上旬開講、9 月中旬修了

（9 月に 3 週間の「集中日本語コース」を実施）

10 月コース：10 月上旬開講、3 月中旬修了

（2 月に 2 週間の「集中日本語コース」を実施）

コースには、日本語教育の授業のほかに、異文化理解・適応に焦点を当てた授業として「異文化体験ゼミナール」（担当は相談部門）が組み込まれる。

コースを修了した留学生は本学の研究生、あるいは大学院生となるが、「全学共通教育科目」「学部教育科目」としての日本語科目、あるいは「春季・秋季集中日本語コース」から各自の日本語力、必要と興味に合った授業を選び、受講することによって日本語学習を継続することができる。

〈各学期報告〉

第 20 期 （2006 年 4 月コース 2006 年 4 月～2006 年 9 月）

10 か国から 11 名の留学生が参加。3 クラス編成。6 名を初級クラス（1 クラス）、4 名を初中級クラス（1 クラス）、1 名を中上級レベルのクラスに配置した。

初級クラスと初中級クラスはその多くが合同でおこなわれ、学生のレベルや進度に応じて柔軟に対応した。また、中上級レベルの 1 名に関しては、センターで開講されている科目を選択する以外に、全学共通教育科目のなかで必要な科目を選択履修する形をとった。

日本語教育担当教員は 3 名の専任教員（庵功雄、石黒圭、鶴田庸子）、および、3 名の非常勤講師（北岡幹子、田中久美子、福岡理恵子）である。

初級および初中級クラスの主な教材：『初級日本語』（東京外国語大学留学生日本語教育センター）とその副教材、『毎日の聞きとり 50 日 初級編』（宮城ほか）、『わくわく文法リスニング 99』（小林ほか）、『ヤンさんと日本の人々 初級』（国際交流基金企画）、『ニューアプローチ中級日本語 基礎編 改訂版』（小柳）、『Basic Kanji Book 基本漢字 500（Vol. 1、Vol.2）』（加納ほか）、そのほか各種自作教材。

第 20 期生名簿

氏 名	性 別	国 籍	修了後配置先
Baruah, Pranamita	F	インド	社会学研究科
Cheng Chua, Karl Ian Uy	M	フィリピン	社会学研究科
Nguyen, Bac Xuan	M	ベトナム	商学研究科
Neau, Ker Wee	M	マレーシア	経済学研究科
Hurley, Karen Denise	F	カナダ	法学研究科
Vladimirov Angel Vladimirov	M	ブルガリア	社会学研究科
Gurhan, Derya	F	トルコ	商学研究科
Diaby, Alia	M	ギニア	法学研究科
Diederichsen, Dolf Hinrich*	M	ドイツ	商学研究科
Wepppler, Simone*	F	ドイツ	商学研究科
Ye, Wenyin**	F	中国	商学研究科

* 交流学生 ** 私費研究生

第 20 期時間割（A：初級・初中級クラス、B：中上級クラス）

		I	II	III	IV
月	A	初級文法・練習 (田中)	初級文法・練習 (田中)	初級文字 (北岡)	初級聴解・復習 (北岡)
火	A	初級文法・練習 (福岡)	初級文法・練習 (福岡)	初中級会話／初級文字 (鶴田／北岡)	初中級読解 ／初級聴解・復習 (庵／北岡)
	B	---	中上級・翻訳による 作文 (鶴田)	---	---
水	A	初級作文・小テスト (石黒)	初級作文・小テスト (石黒)	---	口頭表現 I (中川)
木	A	初級文法・練習 (福岡)	初級文法・練習 (福岡)	異文化体験ゼミナール (横田)	異文化体験ゼミナール (横田)
金	A	初級文法・練習 (田中)	初級文法・練習 (田中)	初級文字・語彙 (石黒)	初中級読解・復習 (石黒)

第 21 期（2006 年 10 月コース 2006 年 10 月～2007 年 3 月）

5 か国から 7 名の留学生が参加。3 クラス編成。4 名を初級クラス（1 クラス）、2 名を初中級クラス（1 クラス）、1 名を中上級（1 クラス）に配置。e-learning クラスを導入。日本語教育担当教員は 2 名の専任教員、及び 3 名の非常勤講師（高橋美和子、田中久美子、福岡理恵子）である。

主な教材：『初級日本語』（東京外国語大学留学生日本語教育センター）、『毎日の聞きとり plus40』（宮城ほか）、『Basic Kanji Book 基本漢字 500 (Vol.1、Vol.2)』（加納ほか）、『中級の日本語』（三浦昭ほか）、e-learning 教材『JPLANG』（東京外国語大学留学生日本語教育センター）ほか。

第 21 期生名簿

氏 名	性 別	国 籍	修了後配置先
Kovani, Maria	F	ギリシャ	言語社会研究科
Babski, Wojciech Andrzej	F	ポーランド	商学研究科
Sarker, MD.Mizanur Rahman*	M	バングラデシュ	経済学研究科
Mirzakhmedov, Mirodil Mirabidovich*	M	ウズベキスタン	経済学研究科
Khan, MD. Ashrafur Islam*	M	バングラデシュ	経済学研究科
Lemeshkina, Anna*	F	ウズベキスタン	経済学研究科
Vig, Julien*	M	フランス	商学研究科

* 大学推薦国費研究留学生

第 21 期時間割

		I	II	III	IV
月	A	初級・文型語彙 (田中)	初級・文型語彙 (田中)	初級・会話聴解 (西谷) e-learning	初級・文字 (西谷)
	C	----	中上級・翻訳による 作文 (鶴田)	----	----
火	A	初級・文型語彙 (福岡)	初級・文型語彙 (福岡)	初級・会話聴解 (高橋) e-learning	初級・文字 (高橋)
	B	----	初中級・会話 (福岡)	日本語選択・ 文章表現入門 (三枝)	----
	C	----	日本語選択・ 文法Ⅱ (三枝)	専門日本語 (庵)	経済の日本語Ⅰ (西谷)
水	A	初級・表現作文 (西谷)	初級・専門語彙 (今村)	----	----
	B	日本語選択・ 社会科学の基礎語彙 (石黒)	日本語選択・ 文法Ⅰ (三枝)	日本語選択・ 中級読解Ⅱ (梅岡)	口頭表現Ⅰ (北岡)
	C	----	----	----	日本語選択・ 口頭表現Ⅱ (梅岡)
木	A	初級・文型語彙 (福岡)	初級・文型語彙 (福岡) e-learning	異文化体験 ゼミナール (横田)	異文化体験 ゼミナール (横田)
	B	初中級読解 (庵)	初中級・文型語彙 (福岡) ----		
金	A	初級・文型語彙 (田中)	初級・文型語彙 (田中)	初級・会話聴解 (高橋) e-learning	初級・文字 (高橋)
	B	初中級会話・聴解 (鶴田)	日本語選択・ 文章表現Ⅰ (三枝)	日本語選択・ 文章表現Ⅱ (今村)	日本語選択・ 上級読解Ⅰ (庵)

1.2 日本語・日本文化研修留学生プログラム

〈コースの概要〉

このコースは、文部科学省国費学部留学生のうちで日本語・日本文化を中心に学び、日本語力が上級レベルに達している者を対象としている。一橋大学では従来、年間 5 名程度の日本語日本文化研修留学生（以下、日研生と呼ぶ）を各学部が中心となって受け入れてきていたが、2004 年 10 月からは、日研生の教育をさらに充実するために、留学生センターが責任をもって指導に当たる体制を下記のように整えた。新しい体制の大きな柱として、修了レポートの作成指導を目標とする留学生センター開講科目「日研生ゼミナール」を新

1. 日本語教育部門

設した。研修生は、従来どおり学部ゼミナールに所属し、各自の希望にあわせて日本語科目、全学共通教育科目、学部教育科目を履修する。

2005 年度来日の日研究生には新しい試みとしてインターンシップとして日本各地の旅館で就業体験を行った。また、2006 年度 10 月渡日学生からは大使館推薦の学生とともに、大学推薦の学生も日研究生ゼミナールに参加し、修了レポートの作成を行うことになった。

2005 年度日本語・日本文化研修留学生プログラム (2005 年 10 月 1 日～2006 年 9 月 30 日)

10 名の研修留学生が以下の修了レポートを作成し、口頭プレゼンテーションを行った (2006 年 8 月 2 日)。留学生センター専任教員 4 名が修了レポートの作成指導にあたった。内容についてはゼミナールの担当教員の指導を受けた。

2005 年度日本語・日本文化研修留学生名簿及び修了レポートタイトル

氏 名	性 別	国 籍	修了レポートタイトル
Kim Mina	F	大韓民国	江戸時代の小学校、寺子屋
Heo Eun Haye	F	大韓民国	同じ夢を見るために：東アジア協同体
Sung Na Young	F	大韓民国	日本の ODA
Kim Hye Young	F	大韓民国	高校文化の形成と社会 ＜日韓高校経験の比較を中心に＞
Park Jin Ock	F	大韓民国	日本語教育におけるインターネットの教育的活用と評価
Yeung Ching Ni	F	中国（香港）	児童虐待
Montgomery Kenneth James	M	米国	日本の大学生における飲酒文化： コミュニケーションツールとしてのお酒
Lee Joshua Holl	M	米国	中国、経済発展（社会主義的市場経済）と貧富の格差『問題』
Sagaeva Akiko	F	チェコ	日本の女性労働：女工の時代から M 字型カーブ時代へ
Zezulak Lukasz	M	ポーランド	日本における「韓流ブーム」：日韓関係への影響

2005 年度日本語・日本文化研修インターンシップ報告

氏 名	国 籍	インターンの場所	日 時
Kim Mina	大韓民国	茨城の江戸屋	8 月 4 日から 11 日
Yeung Ching Ni	中国（香港）	茨城の江戸屋	8 月 4 日から 11 日
Sagaeva Akiko	チェコ	福島 of 山根屋	7 月 21 日から 27 日
Heo Eun Haye	大韓民国	福島 of 山根屋	8 月 8 日から 17 日
Kim Hye Young	大韓民国	紀三井寺ガーデンホテルはやし	8 月 26 日から 9 月 1 日
Zezulak Lukasz	ポーランド	紀三井寺ガーデンホテルはやし	9 月 2 日から 9 月 9 日

2006 年度日本語・日本文化研修留学生プログラム (2006 年 10 月 1 日～2007 年 9 月 30 日)

修了レポート作成の準備として、2005 年度に作成した研修生のレポートを読むほか、日本語論文の構成及び表現等について学習した。2006 年 1 月末に修了レポートのテーマを決定し、留学生センターの専任教員 1 名が指導を担当した。

2006 年度日本語・日本文化研修留学生名簿及び指導教員

氏 名	性 別	国 籍	所属学部	指導教員
Kim Heegon	M	大韓民国	社会学部	渡辺雅男
Koo Min	F	大韓民国	社会学部	足羽與志子
Wang Zhi Ting	F	中国	社会学部	木本喜美子
Li Shu Nan	F	中国	社会学部	木村元
Wu Ching Wai (胡鉦尉)	F	香港	経済学部	今村和宏
Tran Thi Thanh	F	ベトナム	経済学部	今村和宏
Verstegen Rens	M	オランダ	法学部	青木人志
Weber Jitske Dorien	F	オランダ	法学部	只野雅人
Pechova Martina	F	チェコ	法学部	山田敦
Wong Kathryn Patricia*	F	アメリカ合衆国	社会学部	町村敬志
Decosta Jr John Michael*	M	アメリカ合衆国	商学部	島本実
So Wing Suen (蘇詠旋) *	F	香港	社会学部	中島由美
Comer Catherine Anne*	F	イギリス	商学部	古川一郎
Kuo Yi Huan*	F	カナダ	経済学部	佐藤宏
Munz Steffen Daniel*	M	ドイツ	社会学部	倉田良樹

*は大学推薦

2. 全学共通教育科目としての日本語科目

全学共通教育科目として開講される日本語関係科目にはさまざまなものがある。2006 年度は、年間のべ科目数で 25、ゼメスター単位の延べコマ数で 31 コマ (1 コマ=90 分授業が週に 1 回で、2 単位に相当) になる。以下に各科目の担当者、コマ数、対象 (特に明記しない限り留学生を対象とする)、内容、総時間数などを表にして記す。

2.1 学部留学生対象の日本語・日本事情科目

「日本語 A」と「日本語 B」は、学部 1 年の留学生を対象にした科目で、「一般日本事情 I」及び「一般日本事情 II」は、主に学部 1、2 年生の留学生を対象としている。この 4 科目が狭義の「日本語・日本事情科目」と呼ばれるものである。

1. 日本語教育部門

表1 日本語・日本事情科目

科目(担当者)	コマ数	対 象	授業内容・到達目標	時期・時間数
日本語A (西谷、鶴田)	2コマ ／週	学部1年生	社会科学の勉学に必要な日本語能力を総合的に養成。特に教科書等を正確に読みこなし、講義を聞いて理解する訓練をする。	夏学期に開講 60時間
日本語B (西谷、三枝)	2コマ ／週	上に同じ	「日本語A」に続いて高度な日本語能力を養成する。	冬学期に開講 60時間
一般日本事情Ⅰ (五味)	1コマ ／週	主に 学部1,2年生	広い視野から日本人、日本社会を捉え直し、日本を相対化するための作業を行う。	夏学期に開講 30時間
一般日本事情Ⅱ (五味)	1コマ ／週	上に同じ	現代日本に焦点を絞り、現代日本社会の理解に役立つ歴史的な事柄を扱う。	冬学期に開講 30時間

2.2 全留学生対象の日本語科目

次の表2、表3に掲げる科目は、単位取得が可能な正規科目として、交流学生（交流協定校からの1年の短期留学生）、研究生（日本語研修コース修了生を含む）、日本語日本文化研究留学生（略称「日研生」）、学部1、2年生、大学院正規生など、全カテゴリーの留学生がそれぞれのレベルとニーズにあわせて選択、履修している。

クラス編成はプレースメント・テストの結果、学習者それぞれのニーズ等によって決められる。2006年度の非常勤講師は、梅岡巳香、中川まち子、金井勇人、北岡幹子であった。

表2 選択科目

科目(担当者)	コマ数	対 象	授業内容・到達目標	時期・時間数
日本語選択・ 文章表現Ⅰ (夏：三枝、冬：三枝)	1コマ ／週	主に交流学生、 研究生（中級）	社会科学系の論文を書く際に必要な基本的文型や表現・語彙を習得し、論理的な文章をふさわしい文体で書けるようにする。	夏学期と 冬学期に開講 各30時間
日本語選択・ 文章表現Ⅱ (夏：庵、冬：今村)	1コマ ／週	主に交流学生、 研究生	上記の練習に加え、説得力ある文章を書くための論文構成の技術を習得する。	夏学期と 冬学期に開講 各30時間
日本語選択・ 文章表現Ⅲ (夏：三枝、冬：石黒)	1コマ ／週	主に交流学生、 研究生、学部 1,2年生(上級)	文体、文章構成などについて、ともに議論することを通して、論文を書くのに必要な文章表現技術を身につける。	夏学期と 冬学期に開講 各30時間
日本語選択・文法Ⅰ (夏冬：三枝)	1コマ ／週	主に交流学生、 研究生（中級）	初・中級レベルの文法力を確実なものにする。	夏学期と 冬学期に開講 各30時間
日本語選択・文法Ⅱ (夏：庵、冬：三枝)	1コマ ／週	主に交流学生、 研究生（上級）	中・上級レベルの文法力を確実なものにする。	夏学期と 冬学期に開講 各30時間
日本語選択・ 口頭表現Ⅰ (夏：中川、冬：北岡)	1コマ ／週	主に交流学生、 研究生（中級）	大学生活で自然な日本語が使えるようにする。中級中期レベルの運用能力をつける。	夏学期と 冬学期に開講 各30時間
日本語選択・ 口頭表現Ⅱ (夏冬：梅岡)	1コマ ／週	主に交流学生、 研究生（上級 前半）	大学生活で自然な日本語が使えるようにする。中級後期レベルの運用能力をつける。待遇表現を学ぶ。	夏学期と 冬学期に開講 各30時間

科目(担当者)	コマ数	対 象	授業内容・到達目標	時期・時間数
日本語選択・ 口頭表現Ⅲ (夏冬：金井)	1 コマ ／週	主に交流学生、 研究生(上級後 半)、学部 1,2 年生(上級)	大学生活に必要なプレゼンテーション・ スキル等、高度なコミュニケーション・ スキルを養成する。	夏学期と 冬学期に開講 各 30 時間
日本語選択・翻訳 (夏冬：鶴田)	1 コマ ／週	交流学生、研 究生、学部 1,2 年生(上級)	主に社会科学系の英語文献を日本語に翻 訳することを通して日本語力を向上さ せる。	夏学期と 冬学期に開講 各 30 時間
日本語選択・ 中級読解Ⅱ (夏：金井、冬：梅岡)	1 コマ ／週	主 に 交 流 学 生 、研究生(中 級)	初級文法をふまえた上で長い文にふれ る。語彙を増やす。	夏学期と 冬学期に開講 各 30 時間
日本語選択・ 上級読解Ⅰ (夏冬：庵)	1 コマ ／週	主 に 交 流 学 生 、研究生(上 級前半)	読解のストラテジーを確認しながら、内 容を読みとる力をつける。	冬学期に開講 30 時間
日本語選択・ 上級読解Ⅱ (冬：金井)	1 コマ ／週	主に学部 1,2 年生、交流学 生、研究生(上 級後半)	社会・人文科学分野の専門書を読み、そ の分野の基本概念や表現を習得する。	冬学期に開講 30 時間
日本語選択・速読 (夏：中川)	1 コマ ／週	主に学部 1,2 年生、交流学 生(上級後半)	社会・人文科学分野の学術論文や新聞・ 雑誌などで、生の日本語を読み進む能力 を養成する。	夏学期に開講 30 時間
日本語選択・ 社会科学の基礎語彙 (夏：今村 冬：石黒)	1 コマ ／週	主 に 交 流 学 生 、研究生(中 級)	社会科学の各分野の勉強・研究に必要な 基礎語彙をテキストやプリントを用いて 学ぶ。	夏学期と 冬学期に開講 各 30 時間
日本語選択・ 近代文語文講読 (冬：石黒)	1 コマ ／週	主に日研生、 研究生(上級)	明治、大正期の文語文を読み、その時代 の資料特有の文法や表現を学ぶ。	冬学期に開講 30 時間

2.3 学部生対象の日本語関係科目

「現代日本語論Ⅰ」「現代日本語論Ⅱ」は、留学生を含む、学部生一般を対象とした全
学共通教育科目、「教養ゼミ」は、留学生を含む学部 1、2 年生を対象とした科目、「共通
ゼミ」は、主に留学生を含む学部 3、4 年生を対象とした科目である。

表 3 学部生対象の日本語関係科目

科目(担当者)	コマ数	対 象	授業内容・到達目標	時期・時間数
現代日本語論Ⅰ (夏：石黒)	1 コマ ／週	留学生を含む 学部 1,2 年生	文法、表記、表現選択などを意識化、対 象化して学ぶことによって、文章技術の 向上を目指す。	夏学期に開講 30 時間
現代日本語論Ⅱ (冬：石黒)	1 コマ ／週	留学生を含む 学部 1,2 年生	文章構成、文体、修辞技法などを意識化、 対象化して学ぶことによって、文章技術 の向上を目指す。	冬学期に開講 30 時間
教養ゼミ (夏冬：庵)	1 コマ ／週	留学生を含む 学部 1,2 年生	日本語文法研究史上の著名な専門書を講 読する。	夏学期と 冬学期に開講 各 30 時間
共通ゼミ (三枝)	1 コマ ／週	学部 3,4 年生 交流学生	日本語・日本文化に関する文献を講読する。	通年開講 60 時間

1. 日本語教育部門

科目（担当者）	コマ数	対 象	授業内容・到達目標	時期・時間数
共通ゼミ （今村）	1 コマ ／週	学部 3,4 年生 日 研 生	各自の専門分野における日本語の資料を比較検討する。および、レポート作成の指導をする。	通年開講 60 時間
共通ゼミ （今村）	1 コマ ／週	学部 3,4 年生	日本語文法および日本語教育の文献を読み、討議する。	通年開講 60 時間

3 学部教育科目としての日本語科目（留学生対象）

学部教育の枠組みでは、経済学部において「経済の日本語Ⅰ・Ⅱ」（夏学期、冬学期に各週1コマ）、社会学部において「社会・人文の日本語Ⅰ・Ⅱ」（夏学期、冬学期に各週1コマ）がそれぞれ開講されている。法学部における「法の日本語」は、本年度休講。いずれも各学部における留学生の専門日本語能力の向上を図るために開設されているが、他学部の学部生、研究生、交流学生、日研生も履修することができる。

表4 学部教育科目

科目（担当者）	コマ数	対 象	授業内容・到達目標	時期・時間数
経済の日本語Ⅰ （夏冬：西谷）	1 コマ ／週	主に経済学部の交流学生、研究生（上級前半）	経済学を中心とする社会科学の分野で使われる語彙・表現をテキストを用いて学習するほか、日本経済新聞などの記事を講読し、テレビニュースを視聴する。	夏学期と冬学期に開講 各 30 時間
経済の日本語Ⅱ （夏冬：今村）	1 コマ ／週	主に経済学部の学部生、交流学生、研究生（上級後半）	日本経済新聞などの記事や経済学・商学の専門文献の抜粋をテキストとして使用し、主に経済学の分野で用いられる語彙・表現を細かなニュアンスまで掘り下げて学習するとともに、筆者の視点や価値判断を読み取る。	夏学期と冬学期に開講 各 30 時間
社会・人文の日本語Ⅰ （夏：河野）	1 コマ ／週	学部の2年生、交流学生、日研生、研究生	社会学の専門知識について理解させる。	夏学期に開講 30 時間
社会・人文の日本語Ⅱ （冬：河野）	1 コマ ／週	学部の2年生、交流学生、日研生、研究生	「社会・人文の日本語Ⅰ」の内容をさらに深める。特に社会学の専門知識について理解させる。	冬学期に開講 30 時間

4 大学院科目

4.1 留学生のための大学院科目

大学院科目においては、2006年度、経済学研究科で「経済専門文献日本語」が、社会学研究科で「総合社会科学日本事情」が、言語社会研究科で「専門日本語表現技法Ⅰ・Ⅱ」が、国際・公共政策大学院で「日本研究Ⅰ」が開講された。科目によっては、留学生に限定せず、日本語を母語とする学生にも開講されている。

表 5 大学院科目

科目 (担当者)	コマ数	対 象	授業内容・到達目標	時期・時間数
経済専門文献日本語 (夏冬：今村)	1 コマ ／週	主に経済学 研究科の修 士、博士課程 の学生	経済専門文献日本語の理解における落とし穴に目を向け、言語表現に現れる筆者の視点や立場を読みとる。同時に論文執筆、発表の技術も指導する。	夏学期と 冬学期に開講 各 30 時間
総合社会科学日本事情 (夏：河野)	1 コマ ／週	主に修士 1 年 生、研究生	戦後の日本人論、日本文化論の著作を複数講読し、その内容を自分の身近な問題として検討する。授業参加者に自分なりの「日本人論」を考察してもらう。	夏学期に開講 30 時間
専門日本語表現技法Ⅰ (夏：鶴田)	1 コマ ／週	主に言語社会 研究科の学生	文章表現と口頭表現の基本的特徴を押さえる。	夏学期に開講 30 時間
専門日本語表現技法Ⅱ (冬：鶴田)	1 コマ ／週	主に言語社会 研究科の学生	学術的文章の特徴に習熟するための訓練を行う。	冬学期に開講 30 時間
法言語文化論 (夏：三枝)	1 コマ ／週	主に法学研 究科の学生	憲法を一つの手がかりとして、日本人の思想・行動をいくつかの国と比較しながら考える。	夏学期に開講 30 時間
日本研究Ⅰ (冬：三枝)	1 コマ ／週	主に国際・公 共政策大学 院の修士課 程の学生	戦後の社会的な事件に関して、その経緯、そこに現れる人の考え方について議論する。	冬学期に開講 30 時間

5. 補講としての日本語教育 (秋季集中日本語コース)

正規のカリキュラム外に開講されるもので、単位の認定は行われない。2006 年度は 9 月に 3 週間の集中日本語コースが開かれた。主な対象者は、センターの日本語研修生と交流学生、研究生である。交流学生については、10 月の各学期開始前に来日し、本コースに参加する機会を提供している。クラス編成、授業担当教員、内容、使用教材を以下に記す。

表 6：2006 年度秋季集中日本語コース

(2006 年 8 月 30 日～9 月 15 日、全 65 時間) 担当：西谷

クラス (担当教員)	内容・目標	使用教材
A クラス (中川、北岡)	初級文法・漢字・語彙を確認しながら聴解力の向上を目指し、中級文法へと橋渡しする。(言語社会研究科第二部門の教育実習生が 11 日間の授業を担当し、担当教員は事前事後指導にあたった)	『ニューアプローチ中級日本語』 日本語研究社
B クラス (高橋、村上)	初級文法・漢字・語彙を確認しながら聴解力の向上を目指し、中級文法へと橋渡しする。	『ニューアプローチ中級日本語』 日本語研究社
C クラス (梅岡、飯島)	中級後期の学習者を対象に、アカデミックジャパニーズの運用力を高め、中級から上級への橋渡しをする。	『上級で学ぶ日本語』 研究社
D クラス (金井、今井)	高度な内容の時事問題について読解、討論および文章作成を行う。	『日本の論点 2006』文芸春秋 など
翻訳クラス (三角、中川)	上級学習者が経済学・商学に関する英文を日本語に翻訳する力を伸ばす。	商学研究科の過去入学試験問題等

なお、翻訳クラスは 8 月 30 日～9 月 11 日の 9 日間 (27 時間) であった。

(文責：鶴田庸子、三枝令子、西谷まり)